

## B型肝炎ワクチンの定期接種にむけて

もとはしクリニック 院長  
本橋和夫 先生

10月よりB型肝炎の予防接種が定期接種になります。対象は平成28年4月以降に生まれた1歳未満の乳児のみです。現在WHO加盟の180カ国で定期接種されています。

B型肝炎は全世界で約20億人が感染していると推定されています。そのうち3億5000万人が持続感染者（キャリアー）で、他人への感染源になっています。日本では持続感染者が130～150万人存在すると推計され、年間では5000人以上の新規感染者が想定されています。

B型肝炎には大きく分けて2通りの経過があります。免疫の弱い1歳未満で感染すると、多くが持続感染者になります。持続感染者は肝炎症状のない無症候性保因者（85～90%）と慢性肝炎患者（10～15%）になりますが、どちらも肝がんの発生率が増加します。B型肝炎では小児期の肝がんの発生も報告されています。1歳以降で感染すると、症状が出なくて治癒する不顕性感染で終わる人（70～80%）と、急性肝炎を発症する人（20～30%）に分かれます。まれに劇症肝炎を起こして亡くなる人もいて、国内では累計で3000人ほどが亡くなっています。

B型肝炎は持続感染者の体液（血液・唾液・涙・汗・尿など）から感染します。沖縄県八重山諸島の保育園52カ所において、園児269人（2～4歳）を対象にB型肝炎感染状況を調査した事例があり、10人がB型肝炎の持続感染者の園児から感染した可能性があるという報告でした。このうち4人が持続感染者となっていて6人は一過性の感染でした。B型肝炎は薬による治療はあまり良い成績が得られていないため（インターフェロン療法で有効率が30～40%）、ワクチンによる早期の免疫獲得が最も有効な対抗手段となります。

B型肝炎ワクチンは3回接種しますので、140日ほどの期間が必要です。対象となる人は10月になりましたらできるだけ早期にワクチン接種をしてください。